

# 生れ出る悩み

ありしま たけお  
有島 武郎

私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川という川の右岸にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもある大きなりんご園の中に建ててあった。

そこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふきげんそうな、口の重い、癩で背だけが伸び切らないといったような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟のホックをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にはことにはつきりと私の記憶に残っている。

君は座につくとぶつきらぼうに自分のかいた絵を見てもらいたいと言いだした。君は片手ではかかえ切れないほど油絵や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐げる人のように、ふろしき包みの中から乱暴に幾枚かの絵を引き抜いて私の前に置いた。そしてじっと探るように私の顔を見つめた。明らかに言うと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思った。そして君のほうには顔も向けなくて、よんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

①私是一目見て驚かすにはいらなかった。少しの修練も経てはいないし幼稚な技巧ではあったけれども、その中には不思議に力がこもっていてそれがすぐ私を襲ったからだ。私は画面から目を放してもう一度君を見直さないとはいられなくなった。で、そうした。その時、君は不安らしいそのくせ意地っぱりな目つきをして、やはり私を見続けていた。

「どうでしょう。それなんかはくだらない出来だけれども」

そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑するように言った。もう一度明らかに言うが、私は一方で君の絵に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思いあがったような君の物腰には一種の反感を覚えて、ちよつと皮肉でも言ってみた。くくだらない出来がこれほどなら、会心の作というのはたいしたものでしょうね」とかなんとか。

しかし私は幸いにもとつさにそんな言葉で自分を穢すことをのがれたのだった。それは私の心が美しかったからではない。君の絵がなんといっても君自身に対する私の反感に打ち勝って私に迫っていたからだ。

君がその時持つて来た絵の中で今でも②私の心の底にまざまざと残っている一枚がある。それは八号の風景にかかれたもので、軽川あたりの泥炭地を写したと覚しい晩秋の風景画だった。荒涼と見渡す限りに連なった地平線の低い葦原を一面におおうた霏雲のすきまから午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたった二本ひよろひよろと生い伸びた白樺の白い樹皮を力弱く照らしていた。単色を含んで来た筆の穂が不器用に画布にたたきつけられて、そのままけし飛んだような手荒な筆触で、自然の中には決して存在しないと云われる純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そのままべとりとなすり付けてあったりしたが、それでもじつと見ていると、そこには作者の鋭敏な色感が存分にかがわれた。そればかりか、その絵が与える全体の効果にもしつかりとまとまった気分が行き渡っていた。悒鬱——十六七の少年には嘔めそうもない重い悒鬱を、見る者はすぐ感ずる事ができた。

「たいへんいいじゃありませんか」

絵に対して素直になった私の心は、私にこう言わさないではおかなかつた。それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思った。すぐ次の瞬間に来ると、君はしかし私を疑うような、自分を冷笑するような冷やかな表情をして、しばらくの間私と絵とを等分に見くらべていたが、ふいと庭のほうへ顔をそむけてしまった。それは人をばかにした仕打ちとも思えば思われない事ではなかった。③二人気まずく黙りこくってしまった。私は所在なさに黙ったまま絵をながめつづけていた。

「そいつはどこん所が悪いんです」

突然また君の無愛想な声が出た。私は今までの妙にちぐはぐになった気分から、ちよつと自分の意見をずばずばと言ひ出す気にはなれないでいた。しかし改めて君の顔を見ると、言わさないじゃおかないぞといったような真剣さがあらわれていた。少しでもまに合わせを言おうものなら軽蔑してやるぞといったような鋭さが見えた。よし、それじゃ存分に言つてやろうと私もとうとうほんとうに腰をすえてかかるようにされていた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を言つたかは幸いな事に今はおおかた忘れてしまっている。しかしとにかく悪口としては技巧が非常にあぶなつかしい事、自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的過ぎる事などをならべたに違いない。君は黙ったまままじまじと目を光らせながら、私の言う事を聞いていた。私が言いたい事だけをあげすけに言つてしまうと、君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけに始めて笑いらしいものを漏らした。それ

がまた普通の微笑とも皮肉な痙攣とも思いなされた。

それから二人はまた二十分ほど黙ったままで向い合ってすわりつづけた。

「じゃまた持つて来ますから見てください。今度はもつといいものをかいて来ます」

その沈黙のあとで、君が腰を浮かせながら言ったこれだけの言葉は④また僕を驚かせた。まるで別な、初な、素直な子供でもいったような無邪気な明るい声だったから。

不思議なものは人の心の働きだ。この声一つだった。この声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。私は結局君をいろいろに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は学校はどこです」

「東京です」

「東京？ それじゃもう始まっているんじゃないか」

「ええ」

「なぜ帰らないんです」

「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになったんです。……それから少し都合もあつて」

「君は絵をやる気なんですか」

「やれるでしょうか」

そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るような顔つきになった。私もそれに対してなんと答えようもなかった。専門家でもない私が、

ごろくまい え み 五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命全体をどうして大胆にも決定的に言い切る事ができよう。少年の思い入ったような態度を見るにつけて、私にはすべてが恐ろしかった。私は黙っていた。

「僕はそのうち郷里に——郷里は岩内です——帰ります。岩内のそばに硫黄を掘り出している所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上げて送りますから見てください。……絵が好きなんだけれども、下手だからだめです」

私の答えないのを見て、君は自分をたしなめるように堅い淋しい調子でことう言った。そして私の目の前に取り出した何枚かの作品をめちやくちやにふるしきに包みこんで帰って行ってしまった。

君を木戸の所まで送り出してから、⑤私はひとりで手広いりんご畑の中を歩きまわった。りんごの枝は熟した果実でたわわになっていた。ある木などは葉がすっかり散り尽して、赤々とした果実だけが真裸で累々と日にさらされていた。それは快く空の晴れ渡った小春びよりの一日だった。私の庭下駄に踏まれた落ち葉はかわいた音をたてて微塵に押しひしやがれた。豊満の淋しさとというようなものが空気の中にしんみりと漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一つの岐路に立って疑い迷っていた時だった。私は冬を目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになって、君の事と自分の事をまぜこぜに考えた。

とにかく君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまっただのだ。

(有島武郎『生れ出る悩み』より)

## 大問一

問五 5ページ11行目——線⑤「私はひとりで手広いりんご畑の中を歩きまわった」とありますが、この時の私の気持ちをわかりやすくまとめましょう。

【解き直し用】

